

巻頭言

「^{うちわ}団扇とエアコン」

理事長 新谷 友良

「どっどど どどうど どどうど どどう 青いくるみも吹きとばせ すっばい かりんも 吹きとばせ」、有名な宮沢賢治「風の又三郎」の書き出しです。連日の猛暑で頭の中は海綿状、すっかり意気地なく賢治の字面に涼を求めてしまいます。

むかし夏の暑さをどのようにやり過ごしたのか記憶が定かではありません。「エアコンができたのは1958年ごろ。そのころのエアコンは、クーラーという名前で呼ばれていた」という説明がホームページにあります。我が家にはずいぶん後までエアコンはありませんでした。扇風機と団扇、それに窓から入ってくる風ぐらいで、それでも夏休みの終わりごろ、少し冷やりとするとさみしい思いをした覚えがあります。

「夏の暑さにうんざり!」と感じ始めたのは会社生活に入ってから。空調の利いた会社との行き帰りが、何とも嫌でした。今のようにクールビズが主流ではなかったので、ネクタイと上着に蒸しあげられて、加えて仕事の不手際のストレスが加わり、帰りの電車で座ることができなかつたときは、周りの人を恨みの目で見まわしました。それでも、家でエアコンを使うことは稀で、ひと夏に何日か寝るときにエアコンを入れることがあった程度です。それが今ではエアコンは毎夜の必需品、天気予報を見る度に熱中症防止に「適切なエアコンの使用」が呼びかけられます。「エアコンを使わずに部屋の中にいた老人が熱中症のために死亡」といったニュースでは、エアコンを使わないことが何か大きな過ちのような扱いです。

寒さには、昔から炬燵があつたり厚着をしたり様々な暖をとる方法が工夫されてきて、今に至る繋がりやを連想できるのですが、暑さに対してはエアコンに到達するまでの連想が何かしっくりきません。「家の作りやうは、夏をむねとすべし」は徒然草の一節ですが、暑さに対して風通しを良くする、木陰を作る、麻や木綿の服を着る、行水をするといった昔風の耐暑法と「エアコンを入れてガンガン冷やす」という問答無用の対応とは随分肌合いが違う感じがします。こんなことをあまり書くと、エアコンの利いた部屋で「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり」を名句だと感じ入るのは噴飯ものという陰口が聞こえてきそうですが…。